

## 歴史資料保存事業と 資料修復ワークショップ

### 1 はじめに

鳥取県立公文書館（以下、当館）では、中国四国地区アーカイブズウィーク連携講座に合わせて、平成20年度から「アーカイブズの世界」と題する企画展を実施している。6回目となる今年度は、「紙資料を修復する」をサブタイトルに、30数点の資料を展示した。今回は、この会期内に、鳥取県で文化財等の修復を手がける秦博志さんを講師とする資料修復ワークショップを開催した。本稿では、当館が行う歴史資料保存事業と企画展・ワークショップの概要について紹介する。

### 2 歴史資料保存事業

平成19年度から開始してきた歴史資料保存事業は、当館が所蔵する資料のうち、破損や劣化が著しいため長期保存に支障があり、また県民への利用が困難であるものを、専門事業者（以下、事業者）への委託により修復や電子化を行うものである。対象としているの

は、マイクロフィルム、写真類（アルバムやネガ等）、図面や公文書綴り（以下、簿冊）、複製本である。紙幅の関係もあるので、マイクロフィルムの電子化、写真類（アルバムやネガ等）の修復と電子化、簿冊の修復についての概要と若干の私見を述べてみる。実績は、平成26年12月末現在である。

### （1）マイクロフィルム

TAC ベースで酢酸劣化の著しいマイクロフィルム（35ミリ）271リールを3年かけて電子化した。対象とするマイクロフィルムは、鳥取県史編纂事業（昭和38～56年度）の際に、個人や類縁機関等が所蔵する資料を撮影したものである。電子化の規格は、TIFF・A3 認識・400dpi・グレースケール・圧縮とし、データは、リスク分散と利用を考えてDVD-R とハードディスクに保存した。

当初、電子化すれば、マイクロリーダープリンタで紙焼きするよりも、“早くて楽に”複製できるものと考えていたが、windowsにある画像ビューワソフトでは連続印刷が困難なことが分かった。そこで、2年目の仕様に、専用のソフトとレーザープリンタ（白黒）の納品を追加した。これによって、マイクロリーダープリンタを利用するよりも優位に印刷することが可能となった。

電子化事業は往々にして、電子媒体やデータが長期保存に耐えられるかという議論にいきがちであるが、その前に、電子化をどう利用に結びつけるかという視点が必要だと感じる。

### （2）写真アルバムの修復と写真類の電子化

対象とする写真アルバムは、表紙やのど部分の破損、写真の台紙からのはく離や写真自体の破損がみられるものである。これについては、①アルバム本体の修復、②写真の電子化、③複製本の作成、を行った。修復を終えた本体は、原則保存用として排架、複製本を利用に供することとした。

写真類（ネガフィルム、ポジフィルム、ガラス乾板等）は、①電子化の実施（35mmの

白黒ネガフィルムの場合は、JPEG・600万画素相当の規格・グレースケールとした）、②電子データはCD-R とハードディスクに保存、③フィルム類は、専用のフォルダやネガカバー等に収納、④写真データはすべて紙焼き（L判）にして専用アルバムに収納、とした。その後の整理は、歴史資料保存事業を担当する職員が、目録化とメタデータの付与等を順次行っている。

写真アルバムの修復と写真類の電子化では、アルバムや原版等の長期保存を第一義とし、電子データは、保存よりも利用することに主眼を置いた。電子化したことで、利用や提供が容易となり、また写真を中心とした企画展を開催するなど、実効の上がる事業となっている。

### （3）簿冊の修復

簿冊の修復は、歴史的価値、劣化の度合い、利用頻度を勘案して事業者に委託している。実績は7年間で20簿冊であるが、和紙、洋紙、罫紙、ざら紙、薄い紙、厚い紙、寸法が違う紙が混在することから、仕様書の作成には毎回頭を悩ませている。当初は裏打ちのみ、その後は両面打ちを含めた仕様としてきたが、今年度発注分は、リーフキャストイングを主体とする仕様に変えた。

全収蔵物の劣化調査を行ったうえで、計画的に修復を進めるのが理想ではあろう。しかし、特に簿冊の場合は相当な経費が必要となる。それを考えると、劣化が著しいから即修復ということにはいかない。相当の経費をかけて修復することの妥当性を県民に判断していただくことも必要である。当館が、修復を終えた資料を用いた企画展を再三実施するのは、そのためでもある。

### （4）企画展「アーカイブズの世界」

「アーカイブズの世界」と題する企画展は、公文書館になじみの薄い県民に、資料保存の重要性を啓発することを目的として実施してきた。これまでのサブタイトルは「公文書館

の仕事と資料の修復」「残すということ」「紙とデジタルの共存」「災害を越える」「引き継がれた記録」と続き、今回「紙資料の修復」をサブタイトルとした。

観覧者に、「アーカイブズなんて横文字使ってもらっても分からん！」と言われたことが記憶に残るが、鳥取県唯一の公文書館として、その普及・啓発に努めるのは責務であるとの思いから、毎年開催している。

以下は、手製パンフ「紙資料を修復する」(<http://www.pref.tottori.lg.jp/secure/914581/pan.pdf>)の巻頭言である。

公文書を初めとする大量の紙資料を保存する公文書館ですが、これらの資料には紙の破れや汚れ、酸性化に伴う劣化など、様々な問題があります。貴重な資料を後世に残していくためには、紙の性質に合った適切な修復を施すことが必要です。公文書館では、これらの紙資料を、歴史的価値、劣化の度合い、利用頻度を勘案して、年次計画で修復しています。また、軽易な破損のある紙資料については、職員が技術を学んで、日々修復を行っています。本展は、これまでに修復の終わった貴重資料（絵図や写真資料を含む）をご覧いただくとともに、修復によって見えてきた歴史をご紹介します。また、西伯郡南部町で文化財修復に取り組まれる秦博志さんのご協力を得て、修復作業の裏側をご紹介します。

今回の展示では、特に歴史資料保存事業で修復を行った簿冊や図面をもとに、紙資料の劣化と保存する意義について紹介した。企画の段階で、鳥取県出身で、県西部の南部町で修復工房 HATA Studio を経営される修復士・秦博志さんに協力をお願いすることにした。展示物には、秦さんがリーフキャストリングを用いた修復や書籍を修復されている様子を撮影した写真や修復器材を加えた。この際の工房での打ち合わせの中で、秦さんを講師と



秦さんから喰裂きの技術指導を受ける当館職員

するワークショップを開催してみてもどうか、という話となり、それを会期中に行うことにした。

#### (5) 職員による簡易修復

簿冊の修復に話を戻すが、一冊すべての修復を必要とする簿冊は事業者任せの方が容易である。しかし、2、3丁といった僅かな部分に破損がみられる簿冊は、分量的な問題があつて事業者への発注が難しい。このような簿冊は、職員が修復できるようにすれば、委託する費用も不要となり閲覧にも素早く対応できる。そこで担当職員を含めた数名が、秦さんのご厚意で、数年前から技術指導をいただいている。

秦さんには、紙の性質から劣化原因、その対処法についての講義と共に紙の破損（破れや閉じ穴の破損、虫食い等）の繕いについて学ばせていただいた。これを受けて、実際の作業に用いているのは、喰裂きした薄手の和紙で破損部分を修復するやり方である。必要な器材も秦さんの指導を受けて揃えた。喰裂きによる修復については、国立公文書館が公開する「被災公文書等修復マニュアル」（平成25年3月）に紹介されているので、ご覧になった方もいると思う。

ここ2年の簿冊の修復については、劣化が著しいものは事業者へ発注し、軽微なものは技術を学んだ職員が、順次修復するというやり方をとるようにしている。



粉消しゴムを使って一枚もの資料の汚れを除去する受講者

#### (6) ワークショップの開催

ワークショップ「紙資料の補修-劣化要因と対処法について-」は、企画展会期中の平成26年7月9日に当館で開催した。受講の対象者は、日常的に紙資料を扱う資料保存機関の職員に限定した。この機会に修復の知識や技術を学んでもらうこと、資料修復や保存に関する情報の共有・連携を目指したことがその理由であった。想定以上の受講申し込みが

あったが、場所と内容の関係から、博物館(4名)、図書館(4名)、当館(2名)の10名(女性7名、男性3名)とした。

当日は、秦さんの講義の後、粉消しゴムを使った一枚もの資料の汚れ除去(クリーニング)法と喰裂き和紙による繕いの実習を行った。

受講者の一人は、新聞社の取材に、「少ない予算なので簡単なものは職員で修復する。展示の時にとっても役立つので技術を学びたかった」と答えている(7月10日付け「日本海新聞」)。

今回のワークショップは、当館の経験の延長線上に位置するものであったが、わずかな器材を準備すれば、誰でもできる技術であることが受講者に分かっていたただけでも、開催の意義はあったと思っている。開催場所を変えながら次年度以降も開催したらどうか、という意見も出ているところである。

鳥取県立公文書館 伊藤 康